

放射能測定車と「ふくしま再生の会」のメンバー。震災後、飯館村を測定に回った



東日本大震災から10年を経て、持続可能な「再生」の在り方があらためて問われている。土地に根ざした歴史や暮らしを浮かび上がらせる芸術祭で知られるアートディレクター、北川フラムさんに、飯館村で進む活動について寄稿してもらった。

# 震災 10年

## 「再生」後押し 芸術の出番

### 飯館のため自分たちが動く



きたがわ・ふらむ 1946年新潟県生まれ。ギャラリー経営の傍ら現代アートを町づくりに生かす活動を展開。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」などで注目された。著書に「ひろく美術」など。

アートディレクター 北川フラムさん

飯館村に、「ふくしま再生の会」というグループがある。2011年に設立され、震災・原発事故後の地域の現在を考えてもらおうと、地道な活動を続けている。村の中心部は原発から約40キロ離れていたが、事故後の避難指示で住民約6200人の大半が村を出た。だが、現在は会の活動などが功を奏して、1500人ほどが村に暮らし、昨年は新たに約100人が移住してきた。

私は3年前から、「再生の会」理事長の田尾陽一さんの呼びかけで飯館を訪れている。震災後の5月に宮城県の気仙沼を訪れたのははじめ、各地で復興活動に関わっているが、田尾さんの呼びかけにはとりわけ素直に応えたいと思った。



田尾陽一さんらによる昔の農機具を使った田んぼの除染作業

元物理研究者の田尾さんは11年6月、仲間たちと飯館に入り、村の放射線量分布マップを作り、山林の汚染度を調べ、除染の効果も測定した。「国や専門

### 自然と人間の共生取り戻す

家が正確なデータを示さない。では自分たちでやるしかない。自然や生活環境がどれほど破壊されたか、事実から地域再生を図ろうとする田尾さんの丹念な作業に敬意を抱いていたのだ。

「再生の会」メンバーは300人を超えていて、活動は高齢者の医療ケアに始まり、田んぼの除染実験、交流事業など多岐にわたる。17年に村に移り住んだ田尾さんは昨年末、これまでの会の活動をまとめた「飯館村からの挑戦」(ちくま新書)を刊行した。原発事故後、政府・行政はさう動いたか、被災地の人々はさう考え、動いてきたかの貴重な記録である。

本書や、私の村でのわずかな体験からも知れるのは、この地域には一個の人間として自律した、実に魅力的な人たちの多いことだ。飯館の人たちの他にも、健康医療班を率い、仮設住宅の定期訪問や村の高齢者の健康相談を続ける80歳の医師や臨床心理士の女性、放射能測定や木材燃焼実験に参加し、今は通いでブドウ畑をつくっている大手企業退職者などがいる。それぞれ

が共鳴し、山や森、川や海がある固有の土地での生活と歴史という、共有資源を守りぬく素晴らしいことを知った。

田尾さんは、福島再生とは「自然と人間の共生を取り戻す」とのことだ。それは私が、越後妻有や瀬戸内など日本の各地で、現代アートの力によって行おうとしてきたことと重なる。

田尾さんらは今、会の活動の一つにアートプロジェクトを加えようとしている。飯館の人たちの多くが直面した原発事故の影響と、山の恵みと田畑の実りが循環する美しい村の生活を、アートを通じて理解してもらおうことが、再生を後押しすると思えるからだ。

私はここ数年、作家やアーティストらを募った村の視察ツアーを開催し、アートに何ができるのか、話し合いを続けている。古くからある国道399号、別名あぶくまロマンチック街道の道歩きをベースに、訪れる人に歴史や生活、星空の美しさを体験してもらおう活動などの提案があった。

今年にはアーティストらが集まってフォーラムを開き、具体的なプロジェクトの方向性を決める予定だ。アートの出番がやってきた。